



火傷あととオイル染みと——Working Holidays in Tours

メルセデスの新型Cクラスを、他のジャーナリストとともにドイツでテストしたあと、僕はひとり別れてパリへ向かった。パリの宿はいつも、ヴィラ・ポルト・マイヨールという、小さいが快適なホテルである。ここはパリのフェリク

の出入り口に近くて便利なのだ。食堂の壁にT57ブガッティ・アトランティックをテーマにしたアールデコ調の絵が掛かっているの不思議に思い、初めて泊まったとき尋ねたら、この主人はブガティストなのであった。

急いで顔を洗うのもそこそこに、迎えに来たジャン・ポール・キャロンと晩飯に出る。そこはビヤンクール河岸にあるQuai Ouestという新しい大きなレストランで、いまパリで話題の店だ。日本ならさしずめバイエリアや横浜などにある



ボブ・サザランドのレプリカ・ブガッティに乗ったあと、「こんな楽しい車には乗ったことがないぞ」



90度コーナーにて、ミュールーズ博物館のブガッティに迫るヴァウゼン。空力に対する対照的なアプローチ。

ツールGP1923/1993
のプラクティス・スタート。
ヴォワザンの隣りは
地元メーカーのローラン・
ピラン、2台のブガッティ
“タンク”も見える。



パドックでボディを外して応急修理するサザランドのブガッティ。1/2楕円バネを規制するリーディングアーム取り付け部が壊れた。



ブガッティ“タンク”にはエンジンとコックピット間の隔壁がない。その騒音と熱の凄まじさ！

ような、生の演奏を聞かせる気軽な店だが、パリでは珍しいとみえて、俳優や歌手などセレブリティがよく来るという。ほぼ

満員のテーブルを掻き分けて行くと、ヤアと立ち上がったのは、あのレトロモビルの主催者、マルク・ニコロジと奥さんのイザベルだった。聞けば彼はブガッティでタルガ・フローリオに出場してから、そのままスイス国境に近いディヴェヌヌでまた別のレースに出て、帰ってきたばかりという。いつもながら彼らはタフだ。ドイツで数日間を過ごしたあとだけに、食事もワインも美味しく、おおいに話が弾んで楽しい一夜だった。

今度のフランス行きは、パリから西南へ250kmほどのツールで、1923年に開かれたACFグランプリの70周年記念イベントを取材するためである。1923年GPは、ブガッティT32“タンク”、ヴォワザン“ラボラトワール”など、前衛的な空力ボディのレーシングカーがデビューしたことで知られる。翌日の昼ごろ、プジョーから

借りた106XTでブローニュの森に近い約束の場所に行くと、路傍でニコロジが、例のソニア・デロネイ・カラーに塗り分けたT35の前輪を外して、しきりに何か直している。ブレーキが、レースで酷使して甘くなったので、カムに鉄片を挟んで調整しているのだった。やがてマルクの同僚フランソワ(T37)、クロード(T35)、それにいつもは赤いT35Bに乗っているブルーノが、今回は1926年シュナール・ワルケル“タンク”を300TEで牽引してやって来た。以上がぼくのよく知っているフランスのブガッティ・ギャングたちで、いつでもどこでもGPブガッティをカッ飛ばしてゆく、痛快な連中である。間もなくDBや、フランスでは珍しい英国のレイルトン・エイトなども加わった。そしていつものように、ツールまでどのルートを通るべきや、どこで美味しいものを喰うべきやについて、

カンカンガクガク口角泡を飛ばして議論を始めた。こうなるとお手上げで、すぐに小1時間くらいは経ってしまう。

パリを出て30分くらいで昼飯を喰う。フランス人といっしょに旅行する最大の楽しみは、美味しいものをリーズナブルに提供する店をよく知っていることだ。今回もそのとおりだった。2時間近く飲んだり喰ったりしたあとでは、GPブガッティのペースはいっそう速くなり、たちまちオートルートの彼方に消えた。こちらは地理不案内だから、トレーラーを牽くブルーノのメルセデスに、フラットアウトで追従して、2時間後、無事にツールに着いた。

主催者が取っておいてくれた郊外のホテルにチェックインしたら、バーで手を振る一団がいる。アメリカからやってきたボブ・サザランドたちである。ボブもまた傑作な人で、いろいろ素晴らしい車を持っており、ミッレミアやラグナセカの常連である。昨年日本で行なわれたラ・フェスタ・ミレ・ミアにも、1930年マセララーティ3ℓGPで参加していた。いつも荒唐無稽なプロジェクトと取り組んでおり、CG7月号でテストした、マツダREを積んだマクストンというスポーツカーも彼の発案である。今回は、10年くらい前にスクラッチから製作した1923年ブガッティT32“タンク”レプリカを、わざわざアメリカから持って来た。

そこへ小柄ながらがっしりした体軀のフランス人が現われて、「フィリップ・モークです」と手を差し延べた。彼は立志伝中の人物だ。まだ42歳のモークは、ほとんど無一文からスタートして、いまでは自ら興したフランス

随一のハイテク・カーボンファイバー・メーカーの社長である。76年～85年ルノーF1のボディは、すべてモーク社の製品だという。いまでは軍需品からエルメスのトランクまで、モーク社はあらゆる分野に材料を供給している。彼が古い車の虜になったきっかけは、三菱に依頼されて、同社が1936年に製作した全輪駆動PX33の複製を新素材で作ったことだという。そして、たまたま読んだガブリエル・ヴォワザンの伝記に感銘し、1923年のGPカー“ラボラトワール”のレプリカ製作を決意したという。

その夜はモーク夫妻主催のヴォワザン・パーティーで、CGフランス通信員グリフ・ボーグソン、ミュールーズ博物館のガルニエ副館長、ミュージー・アンリ・マラルトルの館長さんなど、多くの知人に再会した。長い、長い食事が終わると午前1時、外へ出ると、草原にはヴォワザ

ン